＊東大附属調査結果概要

中学生の学校及び家庭における生活環境と学習状況の関連

ー東京大学附属中等教育学校における調査結果よりー

報告者　東京大学大学院教育学研究科　藤　田　慶　子

＜調査概要＞

昨年度２月，学びを中心とした学校づくりのための基礎調査研究の一環として，生徒の学習に影響する学校や家庭環境のあり方を検討するため，東京大学附属中等教育学校各学年の生徒と保護者を対象に，質問紙調査を実施した。（生徒：342名／保護者：281名）ほぼ同様の調査を，関東地区Ｋ市の中学校２年生1255名，保護者1018名にも実施し，比較検討に用いた。

以上の調査結果から，統計的手法により，東大附属中の特徴を検出し，家庭及び学校における生活環境と学習状況の関連を検討した。

＜結果考察＞

１，家庭と学校における生徒の学習状況

(1)　家庭での学習・生活の実態

まず，東大附属の生徒の学習・生活の実態調査として，「普段の日にどれぐらい勉強しているか」と，「普段の日にどれぐらい読書をしているか」をたずねたところ，勉強について「ほとんど毎日」と答えた生徒は学年とともに減少していた。しかし，毎日勉強する頻度は下がっても，勉強時間は学年とともに増加していた（ただし個人差の散らばりは増大）。一方で，読書については頻度も時間も学年とともに増えており，自分で選んだものを読んで考えることがふえてきているのかもしれない。子どもの学び離れが言われているが，この結果は，必ずしもそうとは読みとれない結果である。

(2)　学年による行動の相違

ここでは，学年による回答の相違を調べることで，各学年の特徴を捉えた。分析は，質問項目を内容別に分類し（因子分析），回答の評定値をその分類（因子）ごとに合成し，その合成得点の平均値を出して検討した。

その結果は以下のようにまとめられる。

１年生：親による関わり（勉強面・体験活動面）が３学年中で最も多い。また，学級の授業の雰囲気も，他学年に比べて，良くも悪くもまだ安定していない傾向にある。

２年生：親による関わりが１年生よりも少ない。学級内での（授業中の）居場所感得点が高く，授業への参加も他学年に比べて能動的である。学習動機・学習スタイルとも，学習内容（の意味）に興味・関心を持ち，それを高めるような志向性が強い。

３年生：他学年よりも，親による関わりが少なく，授業中の能動的な発言・質問が少ない。学級の授業の雰囲気は安定する傾向があるものの，居場所感を覚える生徒は少ない。充実志向の学習動機は他学年に比べて特に低く，授業に参加している雰囲気と，参加していない雰囲気の両得点とも，他学年より低くなっている。

以上の特徴を見ると，２年生が，中学３年間で最も意欲的で充実した学校生活を送っていると言えそうである。２年生は，中学校生活にも慣れ，生徒自身も，授業中の学級雰囲気も適度に落ち着き，保護者もある程度安心して不必要に干渉しなくなるなど，生徒が自分の関心に従って，自由にのびのびと過ごせていると考えられる。

一方，１年生は，授業を楽しみにして比較的熱心に受ける学級もあれば，落ち着かない学級もあるなど，中学校という新たな環境で，様々な刺激を受けて新鮮な生活を送っているのかもしれない。しかし，新鮮で刺激が多い分，まだ安定はしていないということでもある。

そして３年生になると，中学校生活や授業におけるルールや習慣はすでに身につけ，授業の雰囲気は落ち着いてくるのだろう。それが，「授業不参加」雰囲気と「授業参加」雰囲気の得点が他学年に比べて低いことに表れていると言える。また「居場所感」や「充実志向」の得点が低いのは，２年生で充実した楽しい時を過ごすと，さらにその後４年間同じ環境が続く附属中学校の３年生では，２年生の充実ぶりに比べて，相対的に緊張感が薄れてつまらなく感じてしまうのかも知れない。

２，東大附属中の特徴（Ｋ市の中学校との比較より）

ここでは，同時期に実施されたＫ市での調査結果と比較することで，東大附属の特徴を捉えてみた。

(1) 生徒の比較

まず生徒の回答について，東大附属の２年生と，Ｋ市の中学校の２年生で比較した。その結果，「勉強時間」・「ゲーム時間」は20～30分，「ＴＶ時間」については70分ほど，東大附属よりもＫ市の方が長かった。

この結果の解釈は難しいが，第一に，「勉強時間」が長いことが直接成績につながるとは限らず，苦手だからこそ時間がかかる可能性もあるので，Ｋ市の生徒の方がよく勉強をしていて成績も良いとは必ずしも言えない。第二に，20分や30分の差を大きいと見るか小さいと見るかでも解釈は変わるが，ＴＶ時間の70分という差は大きいと考えられるため，「ゲーム時間」の多くがテレビゲームだと想定すると，Ｋ市の生徒の方がテレビに向かう時間がかなり長いということになる。いずれにしろ，この結果は成績との関連を見なければ，一概に解釈はできない。

親による関わりは，東大附属の生徒の方が多かった。ただし，関わり方の「質（肯定的な関わり方／否定的な関わり方）」については，今回は調査していないため，関わりが多いことの良し悪しを一概には言えない。とはいえ，東大附属の保護者の方が，子どもの生活や学業に，より多くの関心や注意を払っていることは事実だと言える。

また，東大附属の生徒は授業中に発言や質問をしたり，授業外で授業の話をしたり，勉強を面白いと感じたりすることが，Ｋ市の中学校の生徒よりも多く，能動的に授業に参加している。一方，Ｋ市の生徒は，東大附属の生徒に比べて，先生の話を注意深く聞いたり，ノートをこまめに取ったりするなど，受動的に授業に参加している。授業への能動的参加と受動的参加は，学業達成にはいずれも重要であると思われるが，東大附属の保護者の自由回答の中には，子どもが自分の考えを伝達できる「コミュニケーション能力」を高めて欲しいとの希望が多かった。この結果を見る限り，東大附属の生徒は，「コミュニケーション能力」をＫ市の生徒よりも発揮していると言えよう。

学級の授業の雰囲気については，東大附属の生徒の方がＫ市の生徒よりも成績を競い合い，テストの点数にもこだわる傾向があるが，学級の居心地がよいと感じる傾向も強い。競争意識が過度に強いと，子どもにストレスを与えることにもなるが，度を超さず適度な競争意識であれば，学業達成の良い刺激ともなるであろう。

学習動機については，東大附属の生徒の方が新たな知識への関心が強く（充実志向），自分を高めよう（訓練志向）として学習する傾向が強かった。一方，Ｋ市の生徒は，人から尊敬されたり（自尊志向），褒められたりする（報酬志向）目的で学習する傾向にある。東大附属の保護者の自由回答では，自分らしく独創的であるという「個性」を高めたり，学習への「意欲・関心」を高めたりして欲しいという希望も目立ったが，この結果は，東大附属の生徒の方がＫ市よりも，学習に対して意欲的・自発的であることを示している。さらに，学習スタイルも，東大附属の生徒の方が，学習方略を工夫する傾向にあり，学習内容の意味も理解するよう心がけていることがわかった。また，失敗してもあまりくじけないという特徴も示された。

(2) 保護者の比較

次に，保護者の回答から，東大附属の２年生の保護者と，Ｋ市の中学校２年生の保護者で比較した。その結果，子どもへの関わりについて，あまり大きな差ではないが，東大附属の保護者の方が，やや関わりが多かった。この結果は，(1)の生徒の回答と同じ傾向であり，子どもの回答と保護者の回答に，ほとんどズレがなかったということである。学校や教師への満足感については，Ｋ市に比べて高い。「肯定的評価」についても東大附属の方が高いが，「距離感」については，Ｋ市の得点の方が高く，東大附属の保護者は，Ｋ市の保護者よりも学校や教師に対して少々「気が引けている」ようである。

教育に関する意見では，東大附属の保護者の方が学歴や学業達成を重視しており，Ｋ市の保護者の方が成績よりも生活や学校生活の楽しさを重視していた。また，学校に求める授業スタイルについては，東大附属の保護者の方が，子どもに自分で課題を見つけて解決させたり，共同学習・話し合いや発表をさせたりするなどの「活動型授業」を求めている。この結果は，上述のように，自由回答で「コミュニケーション能力」や「個性」をのばして欲しいという希望が多かったことや，他にも「自己解決能力」を高めて欲しいという希望が多かったことと一致している。

以上の他，さらに別の観点からの分析も可能である。